

写真というメディアと死者の追悼 ―『明譽眞月大姉葬儀写真帖』を事例として

山田 慎也

1 はじめに

死者を悼みその思いを発信するために、さまざまなメディアが活用されてきた。特に写真というメディアの存在は、死者の追悼において重要な機能を果たしている。なかでも、死者の肖像写真は、世界中かなり広い範囲でその利用を見いだすことができ、それ以前の肖像画とともに、重要な位置を占めてきた。それは現在でも重視されつづけており、葬儀の世俗化により以前にも増して重用されるようになっていく。

ところが、こうした肖像写真だけでなく、かつては葬儀の様子についての記録写真も死者の追悼のメディアとして重要な役割を果たしてきた。こうした葬儀写真集が明治期からおもに戦前期まで盛んに作られるようになっていく。写真というメディアを通して、葬儀の記録写真を使用することで、どのような追悼が行われてきたのか、まずは具体的事例をもとに検討していきたい。

2 葬儀写真集の特徴

ここで取り上げる葬儀写真集『明譽眞月大姉葬儀写真帖』（国立歴史民俗博物館所蔵）は、1911（明治44）年2月、東京日本橋魚問屋の老母荒木照氏の葬儀の後に製作されたもので、明治末期の中間層の葬儀について、自宅出棺前から葬列、そして寺院での葬儀式まで、そのプロセスを18枚の写真によって構成されている。明治期の葬列については、ある程度写真が残されているので、分析対象として取り上げられることもあるが、一般の葬儀における出棺前の自宅の様子から、葬列、寺院での儀礼まで、その経過を丁寧に追った写真集は稀有のものであり、当時の葬儀をビジュアル的に把握でき、その様相を示す極めて貴重な資料である。

さてこの葬儀の対象となる荒木照氏は、1911（明治44）年2月4日に82才で亡くなった。同年2月6日付『都新聞』において黒枠の死亡広告が出されており、それによると「八十二歳之高齡を保ち候処昨年来長病に罹り薬餌奏功なく竟に昨四日死去致し候」とあり、長命ながらも前年から病を得て亡くなったことがわかる。葬儀は2月7日に行われ、午後1時に日本橋魚河岸である日本橋本舟町1番地（現中央区日本橋室町1丁目）の自宅から出

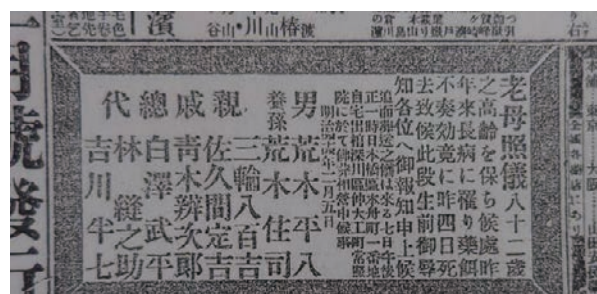


写真1 荒木家黒枠広告（『都新聞』1911年2月6日付）

棺し、深川区仲大工町（現江東区清澄3丁目）の浄土宗常照院で仏式の葬儀をおこなうと告知されている。この広告は、男荒木平八氏、養孫荒木住司氏ほか、親戚総代として、三輪八百吉氏、佐々木定吉氏、青木弁次郎氏、白沢武平氏、林縫之助氏、吉川半七氏が連名で掲載されている（写真1）。

この写真集については、葬儀写真集における遺影の位置づけを通して死者の認識について検討した際に、資料の一部としてとりあげた拙稿（山田 2011）や、明治期の葬儀の実態としてこの写真集について全体的に検討した拙稿（山田 2015）があり、基本的には拙稿（山田 2015）を参照しつつ、死者の追悼という側面から、写真メディアの利用についてみていきたい。

3 形態としての特徴

さてこの写真集が、縦 14.7 センチメートル、横 20.5 センチメートルの横綴じで、モノクロの写真が印刷されており、表紙と裏表紙、20 枚の写真頁で構成されている。表紙は故人の肖像写真が中央にあり、右側に「明譽眞月大姉 俗名荒木照 （行年八十二才）」、写真を挟んで左には「明治四十四年二月四日逝去 此肖像ハ二十年前ノ撮影」とある（写真2）。厚手の洋紙に写真が印刷され、右側横が糸で綴じられている。かつては背表紙を紙で包んでいたようで、その痕跡がみられる。そして裏表紙には、「明治四十四年三月十日五七日法要ニ際シ 荒木平八謹製 東京製版所印行」とある（写真3）。

これによって、故人の三十五日法要に際し、この写真集を製作し関係者に配布したものと思われる。事実、複数存在することが判明しており、歴博所蔵のこの資料は古書店を通して購入されたものであるが、故人直系の孫荒木虎之助氏の妻文子氏によると、荒木家でもこの写真集を所蔵しているという。

このように写真集の形態から、故人の荒木照氏の記念のものということがわかる。肖像写真もその撮影年を添えているが、白い小袖に黒紋付の羽織を着て椅子に腰掛けている上半身の写真である。明治の女性の姿としてよく見られる手を袖に隠して撮影された肖像写真である。

こうした故人の肖像を中心に据え、その脇に戒名を添えていることから、これが故人を記念したものであり、戒名からその人が亡くなっていることが示されている。

この肖像と戒名との関係は、幕末から明治期に盛んに発行された「死絵」とも共通している点であり、戒名と俗名を添え、そこに肖像画が見られる点は、訃報と追善を目的とした死絵との共通性を見いだすことができ、追悼を意味するものと捉えることができよう。

また裏表紙にある「明治四十四年三月十日五七日法要ニ際シ」とあることから、三十五日法要に間に合うように作っている点では、供養を目的に関係者に配布されている。東京製版所という印刷会社に依頼していることで、これを複製して配布していることがわかる。また死亡から三十五日以内にこれが完成している点でも、2月7日の葬儀の撮影から約1ヶ月で完成している点で、かなりスムーズに作られており製作自体が慣れているようである。そして「荒木平八謹製」と喪主、つまり荒木家としてこれを製作していることが分かる。



写真2 『明譽眞月大姉葬儀写真帖』表紙（国立歴史民俗博物館蔵）

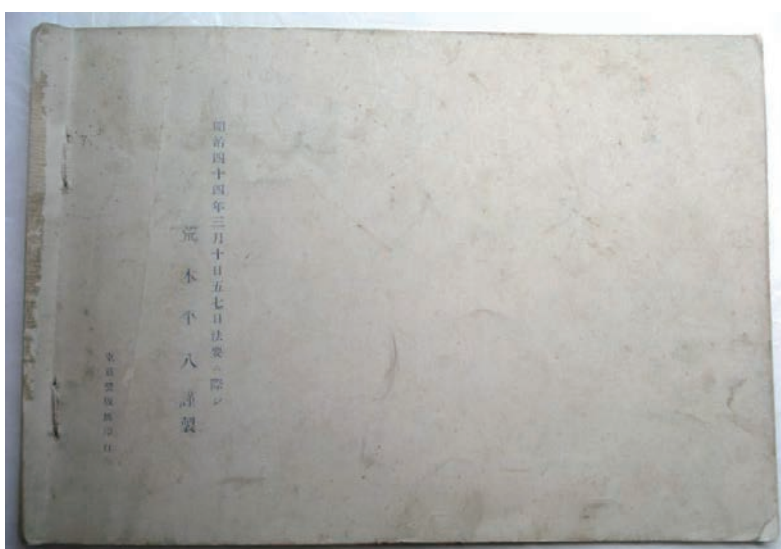


写真3 『明譽眞月大姉葬儀写真帖』裏表紙

4 詞書きと照氏のひととなり

アルバムの二、三頁にある詞書きは以下の通りである。

荒木氏の老母は女丈夫と云つべし。良人は稲平と称し魚河岸の間屋也。明治の初、忝くも魚菜御用を蒙り謹仕二十余年其子平八号潮湖相続て今日に至る。実に老母の助あづかりて力あるなり。老母は侠風ありて江戸児の真面目を存すれども家事を整理し常に余財を蓄ふるなど良家の内子たるに負かず。是れ所謂女丈夫まして也。八十余歳の天寿を完うし、多子多孫膝下に遊戯するは、現世に於て既に極楽の境界にてありき。其安養浄土の女菩薩たる事

疑ふべうもあらじ。余や多年の交よく其人を知り親しく其事を視つゝあり。歡喜の余り筆とりてかくの如し

明治辛亥二月

白念坊如電^{*1}

まず荒木照氏のひととなりを「荒木氏の老母は女丈夫と云つべし」とあり、「女丈夫」であることを第一文で強調している。「明治の初、忝くも魚菜御用を蒙り」とかつて日本橋魚河岸は徳川家御用であったが、明治になって今度は宮内庁に魚を納めるようになり、喪主である平八氏も「謹仕二十余年其子平八号潮湖相續て今日に至る」、その後20年あまりそれを務めて現在に至るという。

そして「実に老母の助あづかりて力あるなり」とあり、こうした家業の繁栄は照氏の助けがある故だとしている。そして照氏の性格は「俠風ありて江戸児の真面目を存すれども家事を整理し常に余財を蓄ふるなど良家の内子たるに負かず」と、義侠心に厚く江戸っ子の気風を持ち、「家事を整理し常に余財を蓄ふ」と家を守りそして財をなしていくなど良家の子女にも匹敵すると評価し、ゆえに「是れ所謂女丈夫まして也」としているのがであった。

そして八十余歳の天寿を完し、「多子多孫膝下に遊戯するは、現世に於て既に極樂の境界にてありき」と天寿を全うし多くの孫や子に恵まれて、膝元で遊ぶ様はすでにこの世に於いて幸福であり、極樂浄土の境地に至っているとのべている。そして「其安養浄土の女菩薩たる事疑ふべうもあらじ」と往生して安養浄土つまり極樂浄土の菩薩となっていることは疑いないと、現世の安穩と後生の安樂といった二世の安樂があることを述べているのである。

こうして、女丈夫という故人のひととなりを述べ、そして荒木家に貢献して家を盛り立て、さらには長寿を全うして生きながら安樂の境地となり、ついには極樂往生して菩薩となるに違いないとし、この写真集自体がこうした故人の追悼、また後生の供養を企画したものであることが、詞書からもうかがえるのであった。

実際、荒木家では「照おばあさんは女丈夫であった」と伝えられていたそうで、決して詞書だけの姿ではなかったのであった（山田 2015）。

5 写真の構成

さてこの写真集は3頁以降から写真頁で構成されている。写真集の3頁は「荒木自宅棺前ノ景」（写真4）で、出棺前の自宅での棺の安置の様子が掲載されている。先にも述べたが明治期の自宅出棺前の状況は珍しいものである。

その後は4頁「芝河岸納屋前」（写真5）、5頁「白澤氏店前」、6頁「尾張屋納屋前」、7頁「中河岸納屋前」（写真6）、8頁「中河岸」、9頁「中河岸」、10頁「中河岸」と、キャプションが場所の名称であり、そこに供物となる蓮華の造花が並んでいる様子の写真

^{*1}従来、「白念坊如庵」と理解していたが（山田 2015）、白念坊の号は大概如電が使用しており、字体から如電の可能性が高い。



写真4 3頁「荒木自宅棺前ノ景」



写真5 4頁「芝河岸納屋前」



写真6 7頁「中河岸納屋前」

*写真はすべて『明譽眞月大姉
葬儀写真帖』から



写真7 11頁 無題



写真8 16頁「深川高橋通り」



写真9 17頁「深川高橋通り」

* 写真はすべて『明譽眞月大姉葬儀写真帖』から



写真10 18頁「常照院内棺前読経」

が続いていく。

そして、11 頁（写真7）、12 頁は特にキャプションは付けられていないが、大型の籠が写っている。これは放鳥（はなしどり）であり、放鳥は近代によく使われた供物で、籠の中に雀や鳩を入れ、寺院に到着した後、これを放すことで、「放生」つまり生き物を放したその功德が故人の供養となるというものである。

そして13 頁「本船町壱番地々先」では、自宅前の出棺前の造花であるが、小型の対の蓮華などが集められている。

そして引導などの儀礼を行う深川の常照院に到着した時点での写真が14 頁「常照院入口」、15 頁「常照院内」であり、所狭しと並んだ蓮華や生花の様子である。そして、常照院までの葬列に関する写真は16 頁、17 頁といずれもキャプションは「深川高橋通り」（写真8、9）であるが、16 頁は蓮華を担いだ人足の行列である。蓮華を肩に担いで揃って進んでいく様子は壮観である。また17 頁は白木の輿と前に続く人力車である。二人の僧侶が人力車に乗っており、その後ろには坊主頭の子供が白木の四角い台を持って一人で人力車に乗っている。さらに後ろには女性と子供が人力車にのっており二人の手には白木の台ののった位牌を持っている。最も奥に白木の輿が人足によって担がれており、その前には白蓮華を一つずつ持った人足が二人居る。脇には輿を置くための呉床を担いだ人も見ることができる。

そして18 頁「常照院内棺前読経」（写真10）とある写真は、常照院本堂での葬儀の様子である。さらに19 頁、20 頁も両方ともキャプションは「常照院内」であり、葬列で運んできた蓮華が本堂の脇座敷にまとめて置かれている様子と、本尊前に白布の机を置き、手前に四花、六角のケソク、香炉が置かれている。奥中央には台に乗った白木位牌、その両脇には六丁が見える。すでに輿がないことをふまえると、これは寺院での儀礼が終わって、火葬場に向かった後の光景と考えられる。

こうして、葬儀の一連の様子が記録されていることが分かる。そのなかでも蓮華の造花や放鳥など、故人に対する供物の写真が、全20 頁の内14 頁と7 割を占めている。つまり写

真集の目的は、こうした大量の供物が供えられている大きな葬儀であることを記念することとも含まれていることがわかる。

6 供物中心の写真と故人の追悼

こうした多くの写真における供物を見ると、その提供者は、おもに日本橋魚問屋関係が多く見られる。またそれだけではなく、歌舞伎役者からの蓮華や生花の写真が6頁、7頁にわたってみることができる。6頁は蓮華と生花の花筒が両方あり、手前の蓮華は当時の歌舞伎役者である「尾上梅幸・尾上丑之助」、「十一代目片岡」とは十一代目片岡仁左衛門、「市川門之助・市川男寅」、「中村芝翫・中村児太郎」などの名札がある。その奥の生花は相撲の親方とおもわれる「甲山力蔵」もあり、芸能関係としてまとめられている。

7頁はじつは6頁と連続しており、「尾上梅幸・尾上丑之助」の右側が、7頁左の「沢村長之助」につながり、左から「尾上栄三郎」、「市川段四郎・市川猿之助」、「沢村宗之助」、「沢村宗十郎・助高屋高助」、「尾上菊五郎」とあり、この6, 7頁は、歌舞伎役者からのものとしてまとめられている。これらの一連の役者を見ると、市川団十郎の名がない。当時九代目市川団十郎は1903年に亡くなっており、まだその名跡を継ぐ人もいないので、ほぼ当時の著名な歌舞伎役者が揃っているのであった。

こうしてみると、荒木照氏の葬儀にこのような大量の蓮華が家の周辺に並ぶまで贈られており、しかも著名な歌舞伎役者がこぞって贈った蓮華や生花が供えられており、こうした照氏の葬儀の偉容を通して、故人を悼んでいることを発信し、また荒木家としてもその威信を示すものとなっている。ただしそれは社会的な威信の表現だけでなく、詞書きにもあるように、照氏の現世での幸福に続いて来世で菩薩となって極楽往生を願う思いもかけているのであり、葬儀の有り様を写真として記録しそれを写真集として複数発行し、他者に配布することで、故人の追悼、追善を行っているのであった。

参考文献

- 井上章一 1984 『霊柩車の誕生』朝日新聞社
岩淵令治 2004 『江戸武家地の研究』塙書房
魚河岸百年編纂委員会 1968 『魚河岸百年』日刊食料新聞社
国立歴史民俗博物館編 2010『死絵』資料図録7、国立歴史民俗博物館
長谷川新吾編 1968 『明治百年と造花の歩み』東京造花工業協同組合
山田慎也 2011 「遺影と死者の人格—葬儀写真集における肖像写真の扱いを通して」『国立歴史民俗博物館研究報告』169集
山田慎也 2015 「『明譽眞月大姉葬儀写真帖』からみた近代の葬列の肥大化」『国立歴史民俗博物館研究報告』199集